

普及啓発講演会京都会場

- 日時・場所 平成 21 年 11 月 23 日（月・祝） 京都文化博物館別館ホール
■講 師 佐々木利和氏（国立民族学博物館教授）
■演 題 「描かれた蝦夷、そしてアイヌ」

こんにちは。過分なご紹介を賜りました佐々木でございます。立っている方もいる中でお話するのは心苦しいのですが、アイヌのフェスティバルということでご容赦ください。

先ほど、開催のご挨拶で中村理事長がおっしゃっていましたが、大和文化の中心であります京都、畿内でアイヌの工芸展をはじめ本日のフェスティバルが行われるというのは、おそらく初めてだと思います。そして、京都で行われるアイヌ関係の展覧会としては最大規模のものになったと思います。ロシアの博物館のご協力を賜りまして、これだけの展覧会が実現されました。皆様のアイヌ文化に対するイメージもあろうかと思いますが、ロシアに残されていた品物の多様さと技の巧みさなどについて、あらためて見直していただければと思います。

これはオムスクの美術館で発見されました平沢屏山という画家の作品です。おそらく皆様方はご存知ないであろうマイナーな作家です。彼はマイナーな画家ではありますが、そこに描かれたアイヌはひじょうに生き生きとしています。彼は南部の大迫、現在の岩手県大迫町の出身ですけれども、そこで自分の家が没落し、当時の東北地方ではよくあったことなのですが、蝦夷地に出稼ぎに行きました。その暮らしぶりは艱難辛苦を極めておりまして、幼い頃に習い覚えた絵を糧に生活していたようです。そんなときに場所請負商人で豪商だった福島屋の杉浦嘉七の知遇を得たこともあり、その場所でアイヌの人々と生活をしながら絵筆をとりました。そして、安政の頃にはヨーロッパ各国と開港の条約が結ばれ、箱館が開港所として選ばれます。その箱館でヨーロッパの外交官を相手に絵を描き始めたのです。安政の開港以降、箱館にはヨーロッパの品物が入るようになり、彼はウルトラマリブルなどのヨーロッパの絵の具や紙を使って絵を描きました。ヨーロッパの絵の具を最初に使い始めたのが長崎か箱館かという議論もありますけれども、少なくとも京都から見ると僻遠の地である箱館で生活をしながら、アイヌの人々の生活をひじょうに生き生きと描き出した作家がいたということです。おそらく日本の絵画史、しかも正当な京都風の画風を大事にする日本の絵画史のなかではあまり語られることのない人物ですし、画題が「アイヌの人々の風俗」ということで、絵を解釈するにもアイヌ文化に関する知識がなければ難しいという側面がありますので、単純に鑑賞絵画の対象にはなっておりません。しかし、そのなかに描かれたアイヌというのは本当に生きている。12枚の小さな作品群ではありますけれども、その辺りを見ていただければと思います。平沢屏山の作品は日本よりもイギリス、ドイツ、アメリカに多く残っております。しかも海外にある作品の方が日本にある作品よりも遥かに優れた作品が多いのです。これは屏山がヨーロッパ人を相手に筆をとったと同時に、彼自身が力を入れて描くに値するだけの購入者がいたということで

す。京都の皆さんは文化的な目が肥えておりますので、彼の作品、そしてアイヌの工芸に対して正当に評価していただけるのではないかと大きく期待しております。

さて、日本史では前近代または近世といいますが、明治維新以前、江戸時代のアイヌの人々の居留範囲は本州の北の方、つまり東北地方から北海道を中心として、樺太、千島列島一円で、北から樺太アイヌ、北海道アイヌ、千島アイヌ、東北アイヌと称され、地域別に独自の文化を発達させたわけですが、“アイヌ”という言葉は“人間”という意味です。人間という言葉が民族名にしているととても誇り高い人々です。“アイヌ ネノアン アイヌ 人間らしい人間” “アイヌ アナッネ ピリカ 人間は美しい” このように自分たちのことを高からしめている誇り高い言葉がたくさんあります。そういう言葉なども含めてアイヌ文化に触れていただければと思います。一般にアイヌの人々の風俗といいますと“アットゥシ” “チカルカルベ” など、独特のアイヌ文様を刺繍した着物を思い浮かべられると思います。ここに掲出しましたのは、明治5年に東京で開かれました文部省博覧会のときのものです。翌年のウイーン万国博覧会の予備博覧会として開かれたものですが、そこに石狩アイヌのシャンケという人物が雇用されます。これは日本政府がアイヌを雇用した最初の例ですが、そのシャンケは志村弥十郎と改名されます。このシャンケの写真がアイヌを写した最古の写真で、撮影したのは日本写真史の劈頭を飾るカメラマンとして有名な横山松三郎です。

次は北海道平取町二風谷の風景で、アイヌ風の家が何軒も建っています。昭和30年代頃まではこうした家が残っていたのですが、今現在は伝統的なアイヌの家はなく、すべて復元されたものです。私が文化庁にいた頃の話ですが、建造物課の調査官から「アイヌの伝統的な家が1軒でも残っていれば国指定の重要文化財にできるけれども、そういう家を知らないか」と聞かれました。残念ながらそういった家はありませんと答えざるを得なかったのです。平取町に部分的には残っているのですが、完全な形でのアイヌの家ではありません。

次はイオマンテを始めるときの儀式ですが、アイヌの方々の姿を彷彿させるのはこういった風俗だと思います。これはヌササンのイナウの前で酒を捧げ神様にお祈りしている様子が描かれています。このような映像や写真がアイヌの人々のひとつの姿として記憶されているはずですが、こういった姿にいたる過程を画像で見てもらいたいと思います。

その前に、平成20年6月6日の衆参両議院の決議で「日本の先住民であることを求める決議」が出されておりまして、国会がアイヌの人々を日本の先住民族とすることを政府に求めています。これはアイヌの人々が日本の先住民族であるという認識のもとに今後の施策を進める必要があるということです。先ほど申し上げましたとおり“アイヌ”というのは“カムイ（神）に対する人間”という意味であり、民族名称としても使っています。民族名称というのはたいへん難しい側面を持っておりますが、日本語を母語としている私たちは何民族でしょうか。大和民族あるいは日本民族という人もいますが、どちらも定着した言葉ではありません。私たちは自分たちのことを日本人という民族であると考えていま

すが、これは日本列島には国境がなかったために民族意識を必要としなかったことに起因しているのではないかと思います。自分たちのことは“日本人”でアイヌの人々のことは“アイヌ民族”ということに若干問題があるのではないのでしょうか。この辺にアイヌの人々の日本列島における、あるいは日本国における立場を不利なものにしている問題があるように思われます。やはりきちんとした意識を持ってアイヌの人々を日本の先住民族と考えていただかなければ、これからのアイヌに対する国民の理解や国の施策が進みにくくなると思われます。

アイヌの人たちは古代には蝦夷（エミシ）と呼ばれました。そして畿内とひじょうに大きな関わりを持っています。中世以降は蝦夷（エゾ）と呼ばれ、東北または蝦夷地と呼ばれた北海道、千島、サハリンに居住していました。文化博物館で展示されているアイヌ工芸、アイヌ文化の萌芽というのは、日本史の中世あるいは近世にあったということです。蝦夷（エミシ）と呼ばれた時代から、中央政権に敵視され差別され、江戸時代には蝦夷（エゾ）という呼称で差別されたのです。その江戸時代、幕府が蝦夷地一円を領土化する際には松前奉行を設置し経営にあたらせるのですが、その奉行を務めていた羽太正養は「エゾは五体備わりたるといえども人倫を知らず」という認識を持っていました。つまり人間と同じ格好をしているけれども人の道を知らない。人の道というのは五倫であり、忠、孝、悌、信、礼などといったものを持っていないと認識していたわけです。しかし、儒学で固まっていた当時の日本人とアイヌの人々とは文化背景がまったく違いますから、五倫など知らないのはあたり前であるにもかかわらず、幕府側の人たちはそのような認識を持っていない。自分たちのものさしで相手をはかって相手を貶める。こうした考え方が施策の中心になっていたということです。

このような認識しか持ち合わせていなかった徳川幕府が蝦夷地をどのように支配したかといいますと、松前藩では米が採れませんので石高制は通用しません。その石高に替わるものとして蝦夷地の海岸をいくつか分割して高級藩士を派遣し、その場所でのアイヌとの交易権を知行として与えます。初めのうちは知行主である藩士が直々に出向いていたのですが、やがてそこに商人が入り込みます。その商人が知行主に代わってアイヌとの交易を請け負うようになります。これを場所請負制といいまして、北海道史あるいはアイヌ史において極めて重要な制度となります。

例えば、私が京都一円、山城の国一国の知行主になったとして、山城の国でとれる米は何万石にもなると思いますけれども、その石高に対して五百両で経営を請け負います。すると当然のことながら五百五十両、六百両、あるいは倍の千両の収益を得ようとするはずで、そのためにアイヌの人たちを酷使して、労働力を収奪して収益を上げるという生産方式をとらざるを得ないわけです。このように場所請負制はアイヌ文化に対し大きな被害、打撃を与えた制度でもあります。ただ、ささやかではありますが、長老を中心とした生活を送っていけるという、ある面での自由さアイヌ自身の自治性というものは確保されていました。

アイヌの人々は常にカムイ、霊的な存在と一緒にあり、カムイは森羅万象に宿っていると考えられています。例えば、人間が作った物にも霊性を認め、それが壊れたときにはきちんとカムイの国に送らなければ、やがて悪霊となって人間に悪さをすると考えます。現在ゴミや廃棄物の問題が取り上げられますが、アイヌの人々の考え方では、使った物をきちんと送らないから、つまり食べ残しをそのまま捨てたりするからゴミが人間に悪さをすると考えられます。このように考えると、現代においてもアイヌの人たちの考え方は生きているといえますか、身につまされるような場面があります。常に物や自然を大事にし、自然を傷めると自然が人間に復讐する。ほかにも温暖化現象を考えてみてください。人間が地球に苛酷なことをしたから地球が怒っている。こういう考えが思想の背景にあるということです。

その思想の核になるのがイオマンテです。クマ送りが代表的ですけれども、神の霊を神の国にお返し申し上げる。アイヌの人々は人間が住んでいる地上をアイヌモシリ（人間の国）とし、天上にある世界をカムイモシリ（神の国）と考えています。神の国では、クマの神様であれシカの神様であれ神様たちは人間と同じ生活をしている。それが人間の国に遊びにいらっしゃるときに、クマの神ならば黒い毛皮、肉、クマの胆をお土産として持ってきてくれる。しかし、クマの神が神の国に帰りたいなというときに自分の手では帰れない。つまり、お土産になるものを人間に残さなければ帰ることができないので、人間の手によって毛皮や肉をはいでもらい、霊の形となって神の国に帰る。これをイオマンテといいます。日常的には狩猟採集の生活で、シカ、サケ、マスを獲り、山野でキノコ、山草を採り、アワやヒエをコタンの近くで栽培していました。アイヌといえば「自然と共にある人々」とされるのは、まさにこうした生活とその思想ゆえでありまして、こういった思想のもとにアイヌ語をはじめ独特のアイヌ文化が生み出されたのです。

一方でアイヌの人々は交易の民でもありました。南方の日本から様々な物を輸入し、樺太、沿海州を経て中国の物が入り、千島列島、カムチャツカ半島、アリューシャン列島を経てアメリカ西海岸の製作技術などが入ってきています。こうしてみると、蝦夷地というのは隔絶されたところでもなく、アイヌ文化は孤立した文化でもなく、全て交易という手段に拠った、文明あるいは文化のクロスロード的な立場にあったことがわかります。ですから、アイヌ文化は劣るわけでもなく、アイヌは五体備わってはいるけれども五倫も知らないというような人間ではないのです。それをひとつのものさしで見るとおかしいことになってしまうのです。

先ほど理事長からお話がありましたけれども、国会の決議に基づいてアイヌの施策に対する懇談会が行われました。その懇談会のときに、北海道だけではなく樺太、千島を含めた土地や資源をアイヌに返せ。長い間差別しアイヌ文化を滅ぼし居住地を奪ったことについて日本政府は謝罪せよ。こうした状況に追い込まれたアイヌはひじょうに困窮しているので、生活のための自立資金を確保する政策を実行してほしい。また、国立大学、特に旧帝国大学の医学部に多いのですが、人類学研究のためと称してアイヌの人々のお墓から頭

骨を中心に人骨を持ち出しています。こうした遺骨をアイヌに返してほしい。アイヌは少数民族だからアイヌの意見を伝えるためには国会での特別議席が必要である。文化伝承が可能となるような環境整備をしてほしい。アイヌ出身の研究者を養成してほしい。現在、いわゆる学問の世界で活躍している、学位を持っているアイヌ出身の若者は1人しかいません。アイヌ出身の研究者というのは極めて数が少ない。アイヌの人々の生活はたいへん苦しい。北海道の例ですけれども、生活保護世帯を比べますと、いわゆる和人よりも数倍も多いといえます。また、進学率も低く就職できないなどの問題もありますので、アイヌの人たちの生活支援のための官庁が必要であろうと思います。そして「アイヌの日」を制定し、アイヌ文化あるいはアイヌ民族の存在を国民の理解に供するような日にしてほしい。このように様々な意見が出されました。

これに対して有識者懇談会の報告では、今後のアイヌ政策の基本的な考え方として、まず先住民族であるという認識を持ち、これに基づいた政策を展開する。それから大きなきっかけとなった一昨年の国連総会の決議を意義付ける。それからアイヌであることのアイデンティティを尊重し、多様な文化と民族共生の場を尊重する。つまり、日本はアイヌ民族と日本語をずっと母語とした人々など、少なくとも複数の民族が共生している国であるということです。外国系の人々もたくさんおりますけれども、少なくとも古くから日本に暮らすのはアイヌ民族と日本語を話す人々であったということです。また、今までのアイヌ施策には国がお金を出しておりますが、半分は北海道が出すというような北海道中心の施策でありました。ところが京都、大阪、九州、沖縄にもアイヌ系の人々は住んでいます。そうした人々が施策の恩恵に与っていないのはおかしいのではないかと。ですから日本全国を見据えた制度のもと国が主体となった全国的な政策を実施し、国民の理解を促進するということです。京都の皆様にはアイヌ文化とは何か、アイヌ民族とは何かをまず知っていただきまして、その上でアイヌの人々が置かれている不利益な状況、差別された状況を考えていただきたい。そのためには教育が第一であり、次にこのフェスティバルのような啓発活動が必要であろうと思います。

それから、文化に関しては民族共生の象徴となる空間の整備が必要です。例えば、京都には京都国立博物館、沖縄には沖縄県立博物館、東京には東京国立博物館がありますが、アイヌ文化独自の博物館はありません。東京国立博物館の一部、国立民族学博物館の一部、北海道開拓記念館の一部にはアイヌのコーナーはありますが、アイヌ文化そのものを紹介する場はありませんので、これが必要であろうと思います。ほかには、研究の促進やアイヌ語の振興です。アイヌ語が絶滅に瀕する言語といわれて何年経ったか。そのアイヌ語をどのように伝承し、かつそれに伴う文化をどのように振興させていくかということです。“イランカラマテ”という言葉をお聞きになったことがあると思います。“こんにちは”という意味ですけれども、こういう言葉がごくあたり前に使われるようになることが必要なのに、日本語あるいは国語の中にアイヌ語に関するものはひとつも含まれていません。また、京都には日本文化研究センターがありますが、そこにアイヌ文化が含まれていません

し、東京には国文学研究資料館がありますが、そこにもアイヌ文学が含まれていません。日本列島の民族であるにもかかわらず、その民族の言語も文学も文化も蔑ろにされているのです。また、アイヌ文化伝承のためには広大な土地が必要になりますので、土地資源の利活用、国有地や公有地をどのように使っていくか、さらには産業振興や生活向上などを推進する体制整備が必要です。

そして最も大事なことは、アイヌ基本法、アイヌ民族法など名称はいろいろ考えられると思いますが、アイヌに関わる基礎的な法律を整備することです。アイヌ文化振興法があるからこそ本日のフェスティバルを開催できますけれども、それ以前にアイヌを日本国民の中に位置付ける基本的な法律が必要です。講演のタイトルから少しそれてしまいましたが、ここから本題に入っていきます。

これは一番古い蝦夷（エミシ）が描写された絵画です。これは国宝として東京国立博物館に所蔵されておりますが、もとは法隆寺にあった「聖徳太子絵伝」です。これは摂津の絵師である秦致貞という人が描いた、延久元（1069）年の作品です。『聖徳太子伝歴』によりますと、聖徳太子が10歳のときに東国の蝦夷（エミシ）が蜂起し、天皇が群臣を集めて「蝦夷（エミシ）に対してどう処置をすべきか」と尋ねると、群臣は「すぐに軍を送って蝦夷（エミシ）を退治してしまえ」というようなことを言いました。しかし10歳の聖徳太子は「それはいけない」とし「蝦夷（エミシ）といえども人間なのだから理を尽くして話せばわかるはずである」として、蝦夷（エミシ）の長に大和の三輪山に向かって、長谷の川で口を濯いで天皇に忠節を尽くしますという誓いをさせた。その様子を絵にしたものです。聖徳太子が愛を持って蝦夷（エミシ）の蜂起を防いでいる。太子の人徳を顕彰するために蝦夷（エミシ）は使われているのです。この「聖徳太子絵伝」は大和絵の最古の作品としても有名ですが、その作品に蝦夷（エミシ）が描かれているということは、時の政権にとって蝦夷（エミシ）がどのような存在であったかということがおわかりいただけるかと思います。ここに描かれている蝦夷（エミシ）は、蓬髪、どんぐり眼、上半身裸で鳥の羽で作った腰蓑を着けている。このような風体で描かれています。

それからしばらく経った後の作品に、土佐光信の「清水寺縁起」があります。ご承知のように清水寺は坂上田村麻呂が深く関わっています。坂上田村麻呂というと高橋克彦氏の小説にありますように、エミシの征伐にあたってアテルイとの友情関係が描かれていますが、その田村麻呂がエミシを征伐している様子をまとめた絵が「清水寺縁起」の中にあります。

ここに田村將軍の部下と蝦夷（エミシ）が描かれています。先ほどの「聖徳太子絵伝」の蝦夷（エミシ）は上半身裸で腰蓑を着けてざんばら髪で、あきらかに畿内の人間とは違うように描かれていました。こちらの蝦夷（エミシ）もよく見ていただきますと手の指が4本だったり足の指が2本だったり、角が生えていたり耳が尖っていたりします。もはやこれは人ではなくて鬼として描かれています。「聖徳太子絵伝」も「清水寺縁起」も蝦夷（エ

ミシ)のイメージをどこに求めたかといいますと、東大寺の四天王の邪鬼に求めたのです。つまり、彼らは蝦夷(エミシ)という存在を知ってはいたけれどもその実態は知らない。その姿を絵画にまとめるときにはイメージを邪鬼に求め、仏敵であり天皇に仇なす存在。邪鬼に等しき存在だということなのです。ただし「聖徳太子絵伝」にある草をまとった腰蓑や羽毛をまとった腰蓑というのは後のアイヌ文化の片鱗が見て取れます。

1324年、中世の「聖徳太子絵伝」もありまして、これにも太子が10歳のときに東の蝦夷(エミシ)が蜂起して、それを太子が諫めて宥めている様子が描かれています。この太子は畿内の人間として大和絵の技法できちんと描かれています。ここに描かれている蝦夷(エミシ)は、先ほどの2つの例と比べますとはるかに描写に信憑性があり、新たに鉢巻や広袖の着物などが加わっております。これはアイヌの人々を描写した絵として、あるいはアイヌ的なイメージをかなり具体的に示した絵として評価できるものだと思います。

蝦夷(エミシ)は京畿の警備にも借り出されています。あるいは防人として最北の方にもいっていますが、大和や京都とも深く関わりを持っている人々なんです。こうして考えてみますと、畿内の絵師たちが蝦夷(エミシ)の情報を得ていたということは理解できますが、1069年の「聖徳太子絵伝」よりは中世の「聖徳太子絵伝」の方がはるかに情報の信頼度が増していると思います。「清水寺縁起」ははるかに時代が下るんですけども、その頃になりますと蝦夷(エミシ)そのもののイメージがまったくなくなっているように思われます。

次は1720年の新井白石の『蝦夷志』です。新井白石は幕閣にあるときに御文庫、徳川幕府の図書館にある本を十分利用できました。したがって、蝦夷(エミシ)や蝦夷地に対する情報を集めやすかったのですが、その中でも絵を使って蝦夷の状況を表したのは新井白石が初めてです。ただ絵に関してはひじょうに曖昧なところがあります。例えばここに描かれている女性がしているのはシトキという首飾りです。こちらの髭面の男性が身に着けているのはエムシアツという刀をさげる紐です。この刀は儀礼用ですから武器ではありません。こうしたものが18世紀の初めに江戸において描かれた。さらに具体的に becoming ののが1800年の村上島之允の『蝦夷嶋奇観』です。村上島之允は先ほど申し上げました平沢屏山と同じく蝦夷地に長くいた人です。この人は松平定信と深い関わりがあった人なのですが、彼が描いた作品のひとつに、アイヌの伝承を日本人に都合よく利用しているものがあります。ここに丸木舟があります。その中にいくつかの漆器があり、この女神も漆器を持ち込んでいます。このお姫様は止事無きお姫様で、宮中のあるところで粗相をしてしまった。それを罪せられて丸木舟に乗せられて何処ともなく流されるわけです。気がつくとも無人島に漂着していて、途方にくれていると1頭の犬が現れて、女神様に何くれとなく世話を焼くようになった。そうしているうちにこの犬と女神様は理無き仲になりまして、十月十日後に男の子と女の子が生まれた。それがアイヌの先祖であって、アイヌの女性は止事無きお姫様の血をひいている。しかし、男は犬の血をひいているということで、アイヌ差別に使われました。このように犬や狼が先祖であるという説話は世界中に広がっています。

この説話を耳にした滝沢馬琴は『南総里見八犬伝』を構想するわけです。馬琴の息子は旗本の松前家に医者として仕えておりましたので、蝦夷地の情報がひじょうに入りやすかった。こうした例は、アイヌを駄目にするために日本人が利用した説話です。

アイヌの説話では、今の羊蹄山が海上に浮かんでいて、そこにお姫様が1人で住んでいて、そのお姫様のもとに天から神様が下られた。その神様とお姫様が一緒になってアイヌの世界を作りあげた。これはアイヌのオイナという物語で語られている説話で、むしろこちらのほうが大事です。犬が祖先であるという説話が政治的に利用されたということを申し上げたくて出させていただきました。

これはイオマンテ、クマ送りが描かれている。先ほどのお姫様の舟の中にも漆器がたくさん積まれていましたが、アイヌ文化では漆器は極めて重要です。特に祭りや祈りの場では欠くことのできないものです。その漆器がたくさん使われています。どういう漆器が使われていたかということ、かつて、東京のデパートの民芸に関わる人たちが北海道へ行きまして、アイヌの人々のところを回って漆器を持ち帰りました。そして昭和17年にその販売会を開催し、その収益が数千円になったということが記録に残っています。つまり、アイヌの文化の中には極めて上質な、しかも古式な漆器が入っていた。東京国立博物館の漆器の中にも高台寺蒔絵の優れた手水鉢があります。こうしたことからわかるとおり、かなり上質な漆器がアイヌ文化の中に入っていたのです。それに目をつけた東京のデパートの人たちが、アイヌの人たちから漆器を買いあさったということがありました。

次は、踊りの中で小袖を着ている男、鳥の羽を綴った服を着ている男、それから草を綴った服を着ている男、アザラシの毛皮で作った服を着ている男が描かれています。このように、アイヌの人々は多様な素材で作った衣服を着ていました。もちろん日本文化の中の着物も多く使われていました。特に儀礼のときに男が着る陣羽織は、今でも儀礼のときにはなくてはならないものとして扱われています。それから、先ほど申し上げました場所請負制における労働報酬として、木綿一反、木綿の切れ端を何枚というような報酬もあったということも申し添えておきます。

これが先ほど申し上げました平沢屏山の作品で、ウマを襲ったクマをアイヌが退治しているのですが、クマはアイヌの人々にとってひじょうに大事な獣です。先ほど申し上げたイオマンテの対象となる獣でもあります。このクマもアイヌに対して理不尽なこと、例えばアイヌが大事にしているウマなどの動物を殺したりすると、これはアラサルシという化け物ということになって獵の対象になります。先ほどクマはカムイとなって天の国に帰ると申し上げましたが、こういった悪さをするクマは神の国に戻ることはできません。地下にあるティネポクナモシリという陰湿でジメジメとした永久に戻るこのできない場所に落とされるのです。この絵は背景から秋だとわかります。ということはこのクマは冬眠の準備をしていたのです。そのクマが大事なウマを襲った。ここに描かれているアイヌは怒りに満ちた表情で獵をしています。ほかにもクマに関する絵が何枚か出ておりますけれども、そこに描かれているアイヌを見比べていただきたいと思います。

これは冬眠中のクマをアイヌが迎えに行っている図です。手前の方に子グマが描かれています。実はこの子グマがアイヌの人々のところにきたがったわけです。それを母グマが私のところに子グマがいるということをアイヌの長に教えるわけです。それを聞いた長たちが母グマのところへ子グマを迎えに行きます。長老がイナウを持って母グマに丁重な祈りを捧げています。つまり、このクマは先ほどのウマを襲ったクマとは違ってカムイとして扱われています。ひじょうに丁寧に扱われて、この場で丁寧な送りをされて神の国にお戻りになる。そういった場面が描かれていますが、実は穴グマをアイヌの人々が迎えに行く様子を描いた絵はほかにありません。ですから平沢屏山という人は、いかにアイヌの人々と密接な関わりを持っていたかということの証左になる絵だと思います。

平沢屏山という人は、先ほど場所請負人の庇護を受けたと申しました。ここにあるのは江戸時代末の絵ですが、ある場所にアイヌの人々が集まっている様子を描いた作品です。最も問題なのは沖合近くに帆印のある帆船が1艘描かれています。これは北前船といいまして関西にも深い関わりを持っています。例えば京都の皆さんがよく召しあがるニシン蕎麦の身欠きニシン。それからコンブ。こういった物は全て北前船を通じて、コンブなどは敦賀から京都にもたらされますし、それ以外のものは関門海峡を通って福山を経て大阪に陸揚げされます。大阪は沖縄についてコンブの消費量の多いところですが、それは全てアイヌの人々が獲ったコンブが北前船によって関西、畿内にもたらされたからなのです。ここに描かれた北前船は、場所請負人がアイヌの生活に深く関わっているということを描写しているのです。アイヌ文化の背後には日本人がいて、その日本人が苛酷な労働を強いている。そして、大漁に獲れたニシンを煮詰めてニシン粕を作りました。ニシン粕は畿内でも関東でも新田開発におけるひじょうに重要な肥料になりました。それまではイワシを干した干鰯（ほしか）を作っていたのですが、イワシの生産量が低くなったため商人たちは大漁に獲れるニシンに目をつけたわけです。そしてニシンで肥料を作って畿内や江戸に持って行ったわけです。日本の近世の後半を支えていた新田開発の成功の要因は蝦夷地でのアイヌの収奪にあったといえるわけです。ですから、江戸時代末期というのは蝦夷地の生産物なくして成り立たなかったという側面があります。そのほかには、干アワビ、干ナマコなどは俵物として長崎から中国に輸出され、莫大な利益を上げています。そういったものが全て北辺の蝦夷地での生産物に依っているわけです。

こういったことが日本人の歴史認識において一般的な理解になっていません。たぶん皆様がお使いになった教科書にはアイヌという存在がなかったのではないかと思います。沖縄に関してはページを割いていると思いますが、アイヌに関しては歴史も文化も国民の常識になっていないと思います。そのアイヌの存在を国民の等しい常識として、国民共有の知識として持っていただくためにはどうすればいいのか。これは偏に皆様方のお力にお願いするしかありません。一人でも多くの方がアイヌ文化に対して、あるいはアイヌの人々に対して理解を示していただいて、彼らへの感謝とお詫びの気持ちを意識する必要があるのではないかと思います。そのための場としてアイヌ文化を知る施設、それから日常的に

アイヌ文化やアイヌの人々に触れられるような場が大事だろうと思います。京都の方々、あるいは関西の方々自身と異なる文化にはたいへん理解の深い方々であると同っており。ここで最も申し上げたいことは、文化をはかる尺度はひとつではないということです。日本文化の目から見るとおかしいこともあるかもしれませんが、それは日本文化から見た場合であってアイヌ文化の目から見るとそうではありません。昭和33年だったと思いますが、北海道庁が公衆の面前でクマを殺すことを禁止する条例を出しました。数年前にそれは廃止されましたが、そのときにアイヌ文化への理解があると称する主婦からの投書が朝日新聞に載りました。その内容は、「私はアイヌ文化を理解している。イオマンテが大事なものであることもわかっている。だけど子グマが殺されるのはとても忍びない。それは真似事でいいのではないか」という趣旨でした。このように和人の尺度をアイヌに求めることができるでしょうか。日本にもいろいろなお祭があり、本当に滑稽なものから、ある面ではこんなこととしていいのかと思われるような祭もあります。それをアイヌ文化の目から見て「こんな酷いことは止めよう」といったら「はいそうですね」と言って止められますか。また、クマの子どもが可愛いというのはわかりますが、アイヌの人々は毎日クマ送りをしているわけではありません。一頭の子グマよりも何百頭、何千頭、何万頭という子ウシが消費されていることは問題ないのでしょうか。このようなことも尺度の違いだと思います。ひとつの価値観でひとつの文化を評価してほしくないのです。今現在アイヌの人々の人口は2万5千人といわれていますが、1億2千万の国民の中では絶対的な少数派です。しかし、絶対的な少数派だからといってその人たちを無視していいということには絶対になりません。

かつて日本人は日露間で取り決められた千島・樺太交換条約の際に、北千島にいたアイヌの人たち約100名を1,000km離れた色丹島に移しました。そこで彼らの生業とはまったく異なる生業を押しつけました。その結果100名いた千島アイヌの人々の文化を伝承する人は現在1人もいません。わずか100名の人々を日本政府は守ることができなかったのです。このようなことは絶対にあってはいけないことだと思います。ひとつの民族が別の民族と共生するというのは数の多寡ではないと思います。その人たちの尊厳をきちんと認めるということが共生だと思います。

京都の皆様方にはアイヌの文化、アイヌの人々の思想、宗教性ということもあわせて理解していただいて、やがてアイヌの人々が日本の中できちんと自分たちの文化、言語、歴史を語れるような場を設けるためにお力を貸していただければと思います。そのための契機としてこの展覧会、あるいはこのフェスティバルがお役に立てればこれ以上嬉しいことはありません。どうもありがとうございました。